

## 2006年度(社)日本青年会議所 / 京都会議 新年式典会頭所信表明演説

1945年8月15日、日本は戦争に負けた。日本中が例えようもない悲しみに包まれた。そして、連合国の占領下に入った。

受諾したポツダム宣言に則って、「日本の軍隊を無条件に解散した」日本国政府の行為は、いつの間にか「日本国そのものが無条件降伏をした」という表現で、国民には浸透していった。

国家の無条件降伏・・・ポツダム宣言の一体どこに書かれていたというのか・・・。無条件という言葉は恐ろしい。我々日本人から抵抗する力を完全に奪い去ってしまった。そして、日本人の最上位の価値観であった「日本の魂(こころ)」さえも、当たり前のように奪ってしまった。

戦勝国の思惑によって、たった六日で作成された新しい憲法のもとで、それまでの日本の価値観、国家制度、教育理念は大きく変わった。

勿論、それはわれわれ日本人の意思で行ったことではなかった。

戦勝国の論理と利益に基づいて、強制されたものだった。

無条件降伏という言葉に洗脳された我が国は、連合国からの要求を無条件にそっくりと受け入れ、極東国際軍事裁判いわゆる東京裁判を経て、侵略国家、贖罪国家の汚名さえ、きせられてしまった。

それがおかしなことと知りながら、しかし無条件に受け入れたことは、武士道精神にのっとりた日本の“いさぎよさ”であったのかもしれない。

あれから60年。われわれ日本人はその“いさぎよさ”を保ち続けてきたのだろうか。もしかすると、その“いさぎよさ”を“大国に屈すること”と、とらえ違えてきたのではないだろうか。

戦後間もなくは、日本の誇りうる文明・文化・伝統そして「日本の魂(こころ)」を守ることよりも、焼けただれた国土を再建し、民が生きることのできる国を作るのに精一杯だったのだろう。

しかし、朝鮮戦争に端を発した奇跡的な経済復興が、われわれ日本人を裕福にした。そして我々は、物質的欲求のとりことになっていった。

倫理が人としての生きる道ならば、道徳はいわばその道の歩き方。そしてまた、道徳は人間の本能、煩悩を律する力を持つ。

敗戦のトラウマによって、歩き方、道徳心を見失ったわれわれ日本人にとって、この物質的欲求はとどまるところを知らなかった。

果たして、今日の日本には、自分さえ稼げれば他人のことなど構わない、今日が幸せなら明日のことなどどうでもよい、といった拝金主義、刹那主義が蔓延してしまった。

今、われわれ日本人は、自分たちの歩き方であった「日本の魂(こころ)」が消えてなくなっていることに、危機感も、関心さえも示さなくなってしまった。  
教育現場では、過去の日本人が野蛮だったと教える間違っただ反戦教育が、この60年間ずっと展開されてきた。そして今もなお、自分の祖国日本について自虐的な教育が続けられている。

自分の国を愛せない者が、どうして他の国を愛することができるのか。自分の国を大切に出来ない者が、どうして世界中の国々を大切にすることができるのだろうか。  
今日もこの国のどこかで子どもたちがこういつている。

「こんなひどいことをした国に生まれてこなければよかった。」

「日本の将来をどう思うかって？ 世界の平和をどう思うかって？ そんなこと、どうだっていいよ。」

\*\*\*\*\*

今、われわれ日本人は、自分の国のことを、日本という国の真の姿を、世界の国々の現実を、どれほど知っているのでしょうか。また、どれほど知ろうとしているのでしょうか。どれほど、関心を抱いているのでしょうか。

われわれは生まれてこの方、ずっと戦争を知らずに生きてきました。物質的にも恵まれ、平和であることが当たり前だと思って生きてきました。

日本が戦争をしたのはずっと大昔のことであって、現在起きている戦争や紛争は遠い異国での出来事で、自分には全く無縁のことであると、多くの日本人が思い込んでいるのではないのでしょうか。

しかし、北朝鮮拉致問題や中国原子力潜水艦による領海侵犯、近隣諸国の戦闘機による領空侵犯や、未だ解決の糸口さえ見出せないでいる領土の問題、また沖縄を中心とした米軍基地問題など、日本はずっと以前から目には見えない戦争に巻き込まれているのです。そして今このときも、軍事的脅威にさらされています。イラク戦争では、米軍の後方支援のために、実際に自衛隊を戦地に派遣しています。先月、この派遣の再延期も政府によって決定されました。

実はわれわれ日本人はずっと戦争とかかわって生きてきたのです。そのことに、ほとんどの国民が気付いていないだけなのです。いや、気付いていないと言うよりも、自分には関係がない、関わりを持ちたくない、真剣に考えようとはしてこなかっただけなのです。

この国の平和とはいったい何なのでしょう。

かつての総力戦とその敗北。そして、その後のアメリカによる占領政策。ついこの間まで続いていた東西の冷戦。今も、私たちの住むこの地球上で繰り返されている、民族衝突、宗教紛争、無差別テロ。貧困による犠牲者も合わせれば、毎日毎日4万人もの人間が死んでいる現実。

そういった無数の殺戮や貧困を傍観し、時に間接的に関与することで支えられ、数多く

の尊い人命の犠牲を土台に築き上げられてきた経済的繁栄。それこそが、今日の日本の平和の中身なのではないでしょうか。

戦前の日本を訪れた多くの外国人が、日本人の凛々しい国民性、穏やかな人柄、道徳秩序を重んじる精神に驚きました。

彼らは、日本の四季が織り成す美しき山河と、この国に力強く生きる人々の美しき精神性とが奏でるハーモニーに感激し、将来は日本こそが世界をリードする国になりえる、と評価していたのです。

しかし、大東亜戦争に敗れ、勝者は正しく、敗者は間違っていたとする史上類を見ない事後法によって裁くと言う裁判、東京裁判において、かつての日本の考え方がすべて邪悪なものだったとジャッジされてしまいました。そして、そのジャッジが「敗戦のトラウマ」となって、日本独自の考え方や価値観、精神性のすべてが間違っていたのだと、われわれ日本人自身が大いなる誤解をしてしまったのです。

ただし、東京裁判を否定し、「敗戦のトラウマ」から脱却せよと言う私の主張は、なにも大東亜戦争全ての正当性をも主張しているわけではありません。

戦争は人類最悪の醜く愚かなる行為です。この国が、あのような惨状を招いた戦争を何故行なう必要があったのか。敗戦間際の勝ち目の無い戦局において、生きて帰っては来れぬ無茶な特攻作戦を何故展開する必要があったのか。日本国政府ならびに戦争指導者に対する責任追及も含め、われわれ日本人の手で、今あらためて、大東亜戦争の総括をせねばならないと私は考えています。

東京裁判の非合法性をもって、先の戦争の総括をせずうやむやにしてしまうことは大変危険なことです。なぜならば、かつての戦勝国ではなく、われわれ日本人の手で、われわれ日本人が行なった戦争の総括を行なわなければ、この国が再び戦争という過ちを犯してしまうかも知れないからです。

憲法をわれわれ日本人の手で創りなおし、真の自立国家への道を切り拓いていこうとしている今だからこそ、この国の子どもたちに、いや大人たちをも含め、戦争の愚かさ、醜さ、恐ろしさ、この国の歴史の真実、そして世界の国々の現実をしっかりと伝えていかなければならないと私は考えています。

われわれ日本人は、戦勝国から与えられた自由主義や民主主義を、目に見える物質的な側面からのみ、とらえました。

物質的繁栄ばかりを追い求め、戦後60年経った今、日本の政治、経済、安全保障、教育、福祉、外交など、さまざまな分野で多くの難題が噴出しています。

世間を見渡せば、世界でも類を見ないほどの自殺者の増加、うつ病患者の急増、親子の断絶、家庭内暴力、ニートの増加、人口の減少など、物質的な豊かさだけでは解決できない問題が、今大きく膨らんできています。

このように病んでいる今日の日本社会に施す処方箋は、優れた政治家たちをもってして

もなかなか見出せないでいます。国家ビジョンが見えぬ今の状況では、具体的な処方箋を見出すことは困難なのでしょう。つまり、拝金主義や刹那主義といった価値観が蔓延した今日の日本社会を前提にして、「明るい豊かな社会」への処方箋を生み出すことは非常に困難であるということなのです。

では、一体どうすればよいのでしょうか。

われわれに残された最後の手段は「価値観の変革」であると思います。

それは、かつての日本人が伝えてきた精神性、いわゆる古きよき日本の価値観を復興する、ということです。

この国が二千数百年培ってきた「日本の魂（こころ）」。

日本人特有の高潔にして勇敢な大和魂、指導者の規範であり自己犠牲をもちとわぬ武士道精神、思いやり溢れ、利他の心溢れる許容性豊かな道徳心といった伝統的な日本の精神性を復興し、心美しき民による、かつての「美しき日本」を再興するのです。

この国がかつて有していた美しき精神性を復興させるのです。

精神ルネッサンスによって「美しき日本」への回帰を図るのです。

過去への回帰などと言うと、すぐに軍国主義の復活に結びつけられることがありますが、そんな陳腐な話しではありません。

この地球上から殺戮や貧困を本気でなくそうと願っているからこそ、「日本の魂（こころ）」を復興すべきと訴えているのです。

中庸の美德溢れる「美しき日本」への回帰を図ることこそ、真の世界平和を導きうる自立国家建設に邁進する我々」に求められた、最大の使命であると私は考えています。

精神ルネッサンス運動。

1年や2年で完成する運動ではありません

この国が、戦後60年かけて墮落させた精神性を、元のかたちへと復興させようとするのですから、時間はかなりかかるでしょう。しかし、10年かかろうが20年かかろうが、われわれが生きているうちにその成果を見ることができなかりょうが、この運動を始めずして、今日の病んだ日本を再建することは困難であると確信しています。

日本はその長い歴史の中で大きな国難を何度もくぐりぬけてきました。

13世紀後半の元の襲来、数々の大飢饉、幕末の黒船の襲来、日清・日露戦争、そして大東亜戦争の敗戦。われわれの祖先は、日本人であることの誇りと、命をかけて、愛する家族を、愛する地域を、そして愛する国を守らんとする強固な精神力で、これらの国難をくぐりぬけてきたのです。

そして今、この国は「精神性の墮落」という目には見えないやっかいな国難に直面しています。経済的に破綻しても国家は再興できますが、精神性が霧散していくということは、国家が、日本という国が、消えて亡くなっていくということを意味します。今、この国が非常に重要な局面に立たされているということ、われわれは気付くべきです。大いなる

危機意識を持つべきなのです。

皆さん！ 今皆さんには、日本人としての誇りはありますか。

日本という国に生まれて本当によかった。だからこそ、日本という国家のために力を尽くそう。そのためには一体何ができるのか。

そんな、国家に対する熱い想いを真剣に抱いたことがありますか。

国民意識の総和である国家とは何か。

今、われわれ日本人は戦後初めて、日本という国家を真剣に考える時を迎えています。この好機を是非とも生かそうではありませんか。

そのためには、まずは市民のリーダーを標榜する我々 J A Y C E E こそが、この国の真の姿を日々学ばなければなりません。世界の国々の現実を誰よりも知らなければなりません。自らに「教育」を施す必要があるのです。

そして、自らの価値観を、勇気をもって変えていかなければなりません。

市民意識変革運動の担い手として、市民の意識を変革しうるだけの訴求力と道徳心を持たなければなりません。復興すべき「日本の魂(こころ)」を礎に、これからの日本が進むべき進路を、我々 J C が率先して、見出していかなければならないのです。

だからこそ皆さん！ この国に生きていることを喜びとし、この国が何をしてくれるかではなく、この国のために何ができるかを考えていこうではありませんか。

社会とのしがらみを越えて、全国4万人ものネットワークを駆使し、理想社会への処方箋を正直にまっすぐに青臭く発信していけるのは、世界広しと言えどもわれわれ J C しかないという自負を、今あらためて持とうではありませんか。そして、その J C の真価を今こそ発揮しようではありませんか。

今われわれがくじけたら、愛する日本の将来は、愛する地域社会の発展は、愛する子どもたちの未来は一体どうなるのですか。

公園で遊んでいる無邪気でかわいい子どもの頭に、サバイバルナイフが突き刺さる社会が、求めてきた理想社会なんですか。

市場原理主義を押し進め、貧富の差が恐ろしく拡がり、機会の平等が失われていく社会が、求めてきた理想社会なんですか。

貧しい老人が、誰にも看取られずに、一人ひっそりと亡くなっていく社会が求めてきた理想社会なんですか。

国の宝である子どもを育てるのは「自由が奪われてめんどくさい」と言っただけの大人がいっぱいいる社会が、求めてきた理想社会なんですか。

親がわが子を虐待して殺してしまう社会が、求めてきた理想社会なんですか。

金を稼ぐためなら何をしていても良いとする社会が求めてきた理想社会なんですか。そんなはずはないでしょう！

この国は今、本当におかしな方向に進んでいます。いや、もうすでに十分おかしくなっ

ている。予想をはるかに超える速度で、われわれが理想としてきた社会とはまったく逆の方向に進んでしまっているのです。

そして、我々の理想とは全く逆のこの社会を創っているのは、紛れもなくここにいる我々自身なのです。そのことにもう皆さんは気付いているはずです。

ならば、社会に対する愚痴はもうやめて、理想社会への扉をわれわれJCの手で、実力行使でこじ開けようではありませんか。今、我々が本気になって動かねば確実に手遅れになります。

市民の意識を変革していけるのは、政治家や官僚ではありません。市民の隣にいる、われわれJCであるということを今一度自覚しようではありませんか。

われわれが社会変革の能動者となるならば、日々学ぶことによって「英知」を磨こうではありませんか。

自らの価値観をもう一度問い直す「勇気」を持つようではありませんか。

新しい日本を導くのはわれわれ青年なんだという、国土としての「情熱」を持つようではありませんか。

英知と勇気と情熱を持ったJAYCEEとしての自信と誇りを胸に、美しい生き方を実践し、市民に魅せていこうではありませんか。

本気になってください。われわれがJCが本気になって動けば、必ずや理想社会は築けます。本気になるか、ならないか、理想社会の実現はこの一点にかかっているのです。

われわれの運動は私利私欲の為にやっているわけじゃありません。愛する子どもたちのために、愛する地域社会の発展のために、愛する国家の未来のために、そして、殺戮や貧困の無い真に平和な世界を実現するために、苦しいときも、悲しいときも、自分がやらねば誰がやるんだといった気概を胸に、身を削って行っているんじゃないですか。だったら、もっと自信をもってJC活動しようではありませんか。もっと自信を持って市民に語りかけようではありませんか。市民の意識を変えることの出来る、ほんもののJC運動を、もっと自信を持って展開していこうではありませんか。

JCのためのJC活動など必要ありません。事業のための事業だって必要ないのです。JCはあくまでも世界を平和に導くツールです。世界を真の平和へと導くことのできる日本国建設のツールなのです。子どもたちの笑顔溢れる、そして市民の笑顔溢れる明るい豊かなあたたかい地域社会を創るツールなのです。

JCはあくまでも手段。だからこそ、「明るい豊かな社会を築き上げよう」などと叫ばねばならないJCのような存在が必要ではなくなるような理想社会を、われわれJAYCEEの手で、世界一可能性を秘めたこのJCなるツールで、建設しようではありませんか。事業を行なって宴会をするだけのJCごっこは、もう終わりにしましょう。そこに市民意識の変革はあったのか。理想社会への光は見出せたのか。崇高な理念なきJCにその存在意義など全くないと私は考えています。

しかし、われわれJCが本気になって力を結集すれば、必ずや市民の意識は変えられます。市民の意識が変われば世論が変わる。世論が変われば政治が変わり、日本が変わる。日本が変われば、世界さえも平和へと変革できるのです。

われわれの力を今こそ信じようではありませんか。全国4万人の尊いJCの力を今こそ結集しようではありませんか。そして、市民の意識変革に邁進していくのです。

この国を「まともな国」にしていきましょう。他人のせいにするのはもうやめて、自分たちの国を、自分たちの地域を、自分たちの手で、手遅れになる前に理想社会へと変えていくのです。

「この国に生まれて本当に良かった！」と子どもたちが心の底から言える国を創るために・・・。

精神ルネッサンス  
美しき日本への回帰  
「日本の魂（こころ）」が未来を拓く

どうか皆さん、崛起してください！  
明るい日本の未来のために！  
真に平和な世界のために！